

連続セミナー

「Black Lives Matter 運動から学ぶことー多文化共生、サステナビリティについて考えるために」

第2回 「民主主義とネクロポリティクス」

岩崎 稔

(1) 問われていることは何だろう。

- ・直接にはアメリカの黒人層に対する警察の暴力や、それに象徴される社会的な構造的な不公正、不平等。歴史的には、アメリカがかつて奴隷制度によって存立していた国であったことの未清算。しかし、それだけだろうか。
- ・問われているのは、モダニティとコロニアリズムやレイシズムとの関係そのもの。だからこそ、黒人層のアイデンティティ・ポリティクスでも、アメリカだけの問題でもない。

(2) コロニアリズム／レイシズムの根深さ

- ・コロニアリズムは、「他者をその本質として措定した属性によって差異化し、その身体を物化する思考と暴力」＝レイシズムによって可能になっている。この植民地主義とレイシズムへの問いを、近現代世界の文化や思想はほぼ欠落させてきた。人権や政治的制度は植民地のリアリティには適用されず、「昼の世界」である西欧の市民社会の裏側に、コロニアリズムは「夜の世界」または **the nocturnal body of democracy** として構築されてきた。
- ・カメルーン出身の哲学者アシュ・ムベンベは、これまでの政治思想が、その批判的な系譜も含めて、つねにヨーロッパのリアリティから思考してきたのに対して、コロナイズドのリアリティの側からそこで作動するシステムを徹底的に描き直そうとして、「**ネクロポリティクス**」という対抗概念を提示。Cf. Achille Mbembe, *Necropolitics*, Duke U.P. 2019.
- ・ムベンベによれば、民主主義や市民社会の成立は、それを可能にした大西洋システム、つまり近代奴隷制と大西洋を挟んだ貿易と相即している。その相関性の側から描いたとき、「**生が死のちょっとした変奏でしかない**」極北の暴力、身体の切断と心性の破壊の動態として近現代史は表れてくる。また、それは「民主主義がアテナイから始まり、一貫して西洋の思想的な展開のなかで格闘の末に花開いた」という神話的物語の解体も伴う。

Cf. デヴィッド・グレーバー『民主主義の非西洋起源についてー「あいだ」の空間の民主主義』

(3) 民主主義からの脱出？

「ネクロポリティクス」論は、同時に二十一世紀への転回過程で、民主主義がたんにその過去を暴かれただけではなく、みずから普遍主義的な請求を放棄し始め、近年西欧世界も「**民主主義からの脱出**」を図り始めていると読解。十九世紀末以後、いちど民主主義と議会主義とのあいだで背反を経験したが、全体主義を経て、戦後にある種の蜜月関係を生み出した。しかし、その前提がこの三十年間に崩壊してきている。この危機のなかで、BLMは、民主主義そのものを普遍的に再構築可能かどうかの試金石でもありうる。

- ・BLMは日本にとって「他人事」ではない。コロニアリズムとレイシズムに対する感度があまりの弱いコロナイザーとしての日本の社会。レイシズムという問題の立て方に「不慣れ」で、せいぜい「民族差別」としてしか受け取られないとき、何が消えてしまうか。